



A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。  
※倍率100%の場合

## 目次

檸檬 <sup>れもん</sup> ……………	5
愛撫 <sup>あいぶ</sup> ……………	19
ある心の風景……………	29
冬の日……………	51
算 <sup>かけひ</sup> の話……………	85
のんきな患者……………	91
城のある町にて……………	135

この作品には不適切と思われる表現がありますが、  
作品の文化的な価値を考慮し原文のまま掲載いたしました。

檸檬  
れもん

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終<sup>おき</sup>圧えつけていた。焦躁<sup>しょうそう</sup>と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿醉<sup>ふつかよ</sup>があるように、酒を毎日飲んでいと宿醉に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖<sup>はいせん</sup>カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何か私を居堪<sup>いたたま</sup>らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故<sup>なぜ</sup>だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてる。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋<sup>のぞ</sup>が覗いていたりする裏通りが好きであつた。

雨や風が蝕<sup>むしば</sup>んでやがて土に帰つてしまう、と言つたような趣きのある街で、土塀<sup>べい</sup>が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびつくりさせるような向日葵<sup>ひまわり</sup>があつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団<sup>ふとん</sup>。匂<sup>にお</sup>いのいい蚊帳<sup>かや</sup>と糊<sup>のり</sup>のよくきいた浴衣<sup>ゆかた</sup>。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希<sup>ねが</sup>わくはここがいつの間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかつた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになつた。花火そのものは第二段として、

あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になつていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めてみるのが私にとつてなんともいえない享樂だつたのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落ち魄れた私に蘇えつてくる故だろうか、まったくあの味には幽かな爽やかななんとなく詩美と言つたような味覚が漂つて来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかつた。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢ということが必要であつた。二銭や三銭のもの——と言つて贅沢なもの。美しいもの——と言つて無

気力な私の触角にむしろ媚びて来るもの。——そう言つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかつた以前私の好きであつた所は、たとえば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壘。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらいのお金を費すのだった。しかしここももうその頃の私にとつては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうな友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまつたあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨い出なければならなかつた。何か私を追いたてる。そして街から街へ、先に言つたような

裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まったり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、その果物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあつて、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴオリウムに凝り固まったというふうに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

またそこの家の美しいのは夜だった。寺町通はいつたいに賑かな通りで——と言つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んでいるが——飾窓の光がおびただ

しく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になつていたので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かつたのが瞭然しない。しかしその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立つて、また近所にある鑑屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。